



2011年1月 第9巻第1号

かく語りき - 聖人の言葉

「宗教とは悟りである。講話や教義や理論がどれほど美しいものであっても、それらは宗教ではない。宗教とは現実にあるもの、自分になれるものであり、聞いたり知ったりするものではない。宗教とは、信ずるものへと魂が変わることである。」

(スワミー・ヴィヴェーカーナンダ)

「私にはヒンドゥーもムスリムもない。誰といっても心の平安がある。私たちの中に住まう神は、私たちに憎しみも偏見も持たせては下さらない。」

(グル・ナナク)

今月の目次

- ・ かく語りき - 聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ 12月の逗子例会 『束縛と解脱』スワミー・メダサーナンダによる講話
- ・ 今月の思想
- ・ 忘れられない物語

- ・ 熊本でのヴェーダーンタ講話に参加して
- ・ クリスマス・イブを祝う集い

今月の予定

- ・ 生誕日・

スワミー・サラダーナンダ 1月10日(月)

スワミー・トゥリヤーナンダ 1月26日(水)

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 1月26日(水)

* 生誕祝賀会を2月の逗子例会で行います。(下記をご参照ください。)

- ・ 行事・

2月の東京例会

2011年2月5日(土) 14:00~16:00

テーマ: バガヴァッド・ギーター (無料)

インド大使館 (03) 3262 - 2391 ~ 7
協会発行の『シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター』をお持ちの方はご持参下さい。

2月の返子例会 第149回スワーマー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会

2月20日(日)

6時 朝拝、朗唱、賛歌

10時30分 礼拝、アラティ、献花

11時45分 朗唱、輪読、講話『スワーマー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージの力』

12時45分 昼食(プラサード)、休憩

14時45分 輪読(ヴィヴェーカーナンダの生涯の物語から)、賛歌、瞑想

16時30分 お茶

ご家族やご友人をお誘い合わせの上、
どうぞご参加ください。

心よりお待ちしております。

12月の返子例会

講話：『束縛と解脱』

講師：スワーマー・メーダサーナンダ

日時：2010年12月19日(日)

人は常に自由を求めて行動します。母親は幼い子供が転んでけがをしないように、子供が一人で動き回るのを止めようとします。一方、子供は本能から一人で自由に動こうとし、親に止められると泣き出します。やがて成長して学校に行くようになると、当人は望んでいないのですが親も教師も子供の行動を管理しようとしています。適齢期になれば、親は子供の将来を考えてふさわしい相手を見つけてやりたいと考え

るのは昔も今も変わりませんが、子供は親に干渉されずに自分で人生の伴侶を選びたいと考えます。ここにも自由でありたいという気持ちがあります。結婚後も、妻は夫を、夫は妻を、管理したがるものですが、互いに自分のことは自由にやりたいと考えます。年を取れば、子供や介護者の世話になることなく自立していたいと考えます。病気になれば、病気の苦しみから解放され自由になりたいと神に祈ります。このように自由は誰もが最も欲するものであり、食べ物や衣類やいかなる楽しみよりも優先順位は高いのです。

動物さえも本能的に自由を求めます。例えば、人間の楽しみのために鳥を鳥かごに入れたらどうなるでしょう。食べ物も寝る場所も確保できたにもかかわらず、これは鳥にとって束縛であり苦しみです。鳥かごから出して自由にしたら、鳥はどんなに喜ぶでしょうか。

自由の様々な形

自由は、18世紀末のフランス革命以降、普遍的な思想となりました。フランス革命のスローガンであった「自由と平等」という概念は、それ以降のほぼすべての国家の政治体制に影響を与えています。例えば、インド憲法では、政治的自由、経済的自由、社会的自由、宗教的自由、および表現の自由をイン

ド政府が保証すると述べられています。

政治的自由とは、いかなる国も他国の支配を受けないということです。日本は第二次世界大戦後、約七年にわたり他国である米国の支配を受けるといふ苦い経験をしています。インドは約千年間、初めはイスラム教徒に、続いて英国に支配されるという不幸に見舞われました。英国の支配は搾取的で屈辱的なものであり、インド国民は他国の支配のもとで大変な苦しみを受けました。

ラーマクリシュナ僧団の高僧で、活力にあふれ霊性、知性、儀式の執り行いについて極めて優れた者がいましたが、この僧はいつもシュリー・ラーマクリシュナに次のように祈っていました。「タクール、私は叡智も大きな信心も得たいと思いません。解脱も霊的経験もいらない。私の望みはただ一つ、自由なインドで死ぬことです。」シュリー・ラーマクリシュナはこの僧の祈りを叶えてくださいました。彼が亡くなる前にインドは自由国家となったのです。

政治的自由は、人が個人として、グループとして、自身の成長のために重要であり欠かせないものです。社会的自由とは、社会のいかなる階級・集団に属する人も他の階級・集団を抑圧したり搾取したりしないということです。

例えば、インドにはカーストという大きな抑圧が存在しますし、アメリカでは昔、白人による黒人の合法的な抑圧がありました。経済的自由とは、誰もが自分で収入を得て快適な生活を送る機会を得る権利があるということです。知的自由とは、誰もが自分の意見を表現する自由があることで、これには出版の自由も含まれます。宗教的自由とは、すべての宗教団体が自らの信じる宗教を実践する自由があることです。しかし、この自由が常にあるとは限りません。例えば、西洋ではカトリック教徒が他の宗派を支配しようとし、ロシアではギリシャ正教会が支配しようとし、日本では、19世紀後半の明治維新の際に、神道が仏教を支配しようとした。

理想的な自由

では、政治的自由、社会的自由、経済的自由、知的自由、宗教的自由が憲法上も実質上もすべて認められている、理想的な国をイメージしてみましよう。そのような国に住む人々は、満たされた気持ちができるでしょうか。これらの自由がすべて保証されて、皆満足感があるでしょうか。

恐らく、そうではないでしょう。こうした自由をすべて享受しているにもかかわらず、人々はやはり内面的な束縛を感じるのではないのでしょうか。自

らの願望や感情という足かせで、欲望や怒り、うぬぼれ、妬みなどに縛られているのです。願望や感情に振り回されることがなくならない限り、たとえ他の面では自由であっても人生の充足感や真の平安、満足感を得ることはないと感じる人がいるはずです。このような現実をよく考えれば、すべての苦しみの根源は輪廻転生にあるということに気付きます。人間として生まれ、悩みや願望、悪に染まりやすい心、病氣、老い、死、恐れ、憎しみ、不安などを持つことが苦しみの原因であると気付きます。

道徳的な人は、悪に染まりやすい心の傾向から自由になりたいと考えます。霊的な人は、願望から自由になり輪廻転生から解放されたいと願います。同様に、理想的国家であれば、政治的自由、社会的自由、経済的自由、知的自由、宗教的自由などを獲得しようと努力するだけでなく、願望や輪廻転生からの自由を求めようとするでしょう。霊的願望は、邪悪な願望から自由になり輪廻転生から自由になりたいと願う気持ちのことです。

宗教的自由と霊的自由

宗教的自由と霊的自由は異なります。前者は教会や寺院に通うなど自分の信じる宗教を実践する自由のことであり、後者は願望や輪廻転生からの自由、す

なわち解脱を指します。私たちは霊性に関心があって集まっているわけですから、霊的自由を中心に考えましょう。

さて、どの国でもどの時代でも人は人生の様々な段階で自由への基本的欲求があるのはなぜなのでしょう。これは、私たちの真の性質であるアートマンが常に自由であるからです。アートマンは、永遠に純粹で、叡智があり、喜びにあふれ、自由です。私たちの真の性質が自由であるから、私たちはあらゆるレベルであらゆる点で自由を求めるのです。しかし、真の自由とは霊的自由でありそれ以外の自由はどれも一時的で限定的で質の低い自由であるということに気付く人はごくわずかです。

スワミー・トゥリヤーナンダは、本当に霊的自由を求める人は非常にまれであると言いました。大半の人は自由と束縛との間で揺れ動いて苦しんでいます。一方では、家族や友人、お金、地位や名声などの世俗的なものへの愛着があり、他方では自由を望んでいます。一方にシヴァの性質（永遠の自由）があり、他方にマハーマーヤの性質（束縛）があるのです。私たちの苦しきは、この対立する性質から生まれるのです。

束縛と願望

私たちの束縛はマハーマーヤによる

もので、私たちを願望で縛ります。私たちの真の性質は永遠の自由であるにもかかわらず、私たちはマハーマーヤに巻き込まれてしまうのです。私たちの母であるマハーマーヤが、子供である私たちを縛り付けるのはなぜでしょう。母は遊びたいのです。神の喜びはこの世の普通の喜びよりはるかに大きなものですから、人間が神の喜びを味わったら誰もこの世に生きたいなどと思わなくなり、マハーマーヤは自分の遊び相手がいなくなると分かっているのです。ある信者は、自分の真の性質は自由であるのに、願望のせいで自分は苦しんで哀れな状態だと不満を漏らしました。

バガヴァッド・ギーターは、私たちの心が縛り付けられている様子を美しく分析しています。「サットワ、ラジャス、タマスの三性質は、すべてプラクリティから生じ、不滅の魂を体にしっかりと縛りつけているのだ。これらの中でサットワは、清らかで光り輝く無垢の性質ではあるが、幸福を求め知識にあこがれるということで肉体をまとった魂を束縛する。おお、罪なき者よ！またラジャスは、情熱の性質であるが、欲求と執着の心を生じ、人を物質的利益のある仕事に縛りつけることを知るがいい。おお、クンティー妃の息子よ！さらにタマスは、無知から生じ、肉体を持つあらゆる者を惑わし、誤解、怠惰、多眠という性向によって、人の霊

魂を縛りつけてしまうということを知るがいい。」(第14章 5~8節)

私たちのエゴが束縛の根源であり、マーヤーという霊的無知の影響もあるのです。エゴとは「私が」「私の」という自分で、アートマンのことを忘れて肉体や心に限定されています。「私が」「私の」とは、無知で、有限で、浅薄で、低い「私」のことです。

三つの執着

私たちのエゴはどうやって肉体や心に制限されているのでしょうか。私たちはよく、肉体が自分であると考え、自分の肉体に関わりのある人や自分が大好きなものを自分と同一視します。肉体、家族、大好きな物への三つの執着がエゴを源として育っていきます。愛そのものは悪いものではなく、自由の障害にもなりません。むしろ、愛が普遍的であれば気高いものです。問題は、愛が特定の人や物に向けられるようになった場合です。こうなると、愛は自由への障害となります。スワミー・トゥリヤナダは次のような美しい例えで説明しています。「ガンガーや海に入ると、何百万トンという水が周りを囲み自分の体にのしかかってくるが、それほど重みは感じない。しかし、水瓶が頭の上に乗っていたらその重みをずしりと感じる。」つまり、普遍的な愛であれば重みや束縛は感じな

いのですが、特定の人や物に向けられる愛は重荷となるのです。限定的な愛は束縛を生み、普遍的な愛は解脱を得られるのです。

動物の中で、サルは親としての愛情や執着心が最も強いと言われています。母ザルは子供が死んで骨になっても抱き続けます。ところが、自分の命が危険にさらされた途端、母ザルは子ザルの骨をさっさと捨ててしまいます。また、束縛や自由という概念があるのは人間だけであることは注目すべきことです。動物には知性や感情はありますが良心はありません。ですから、自由と束縛の状態を比較することができないのです。人間だけがこの二つを比較することができ、自由は束縛よりもはるかに良いと理解し、自由を求めて努力するのです。

執着を捨てる

束縛から抜け出すにはどうすればよいのでしょうか。昔、ある王様が僧侶に同じ質問をしました。僧侶は抜け出す方法を教えて差し上げましようと言い、宮殿の広間へと向かいました。王様は後をついて行きました。広間に着くと僧侶は王様に、柱を抱きかかえてご覧なさいと言いました。王様が言われたとおりにすると僧侶は言いました。「これが束縛です。」続いて王様に柱を放しなさいと言いました。王様が柱か

ら離れると僧侶は言いました。「これが自由です。」つまり、自由が欲しいと泣きながら柱にしがみついているか、それとも柱を放すかは、私たち次第なのです。執着するのをやめて自由になるかどうかは自分が決めることなのですが、時にはあまりにも強くしがみついている手放すことができないこともあります。

夫や妻や子供にしがみつきのながら、自由が欲しいと叫ぶのは、まさにこの状態です。柱にしがみつきのながら、柱から放してくれと叫んでいるのです。そうやってわめいているうちに、その声を聞きつけて人がやってきます。柱にしがみついていないで早く放せばいいじゃないかと、教えてやるのですが、だめ、できないと当人は相変わらず柱にしがみついたままです。そこに、また人がやってきてこの様子を目にします。この人は、しがみついている人の頭を棒で思い切りたたいてやります。すると、柱の人は痛さのあまりついに柱を放すのです。この、棒を持った人がグルです。時には、自然の大きな力が働いて、私たちは大きな打撃を受け大変苦しみ、束縛からの解放を求めるときもあります。しかし、どちらの場合も、神様がグルや自然を通じて御業を行っていらっしゃるのです。

人生というドラマは、執着しては苦しむというサイクルの連続で、永遠に

苦しみは尽きません。輪廻転生は、願望とそれに起因する行為（カルマ）が原因です。カルマは結果を生み、願望は満たされたり満たされなかつたりします。そして新たな願望が生まれ、私たちは再び新たな喜びを求めたり嫌なことを避けようとしたりします。この世界で願望が満たされず、肉体が年と共に衰え願望を追いかけるのに十分でなくなると、私たちは古くなった肉体を脱ぎ捨てて新しい肉体を手に入れる必要があります。前世で満たされなかった願望を果たしたり、自分の行為の結果を刈り取ったりするために、そうやってさらにいくつもの生を繰り返す必要があるのです。

輪廻転生

なぜ人はこの世に再び生まれてくるのでしょうか。私たちは、粗大な体、精妙な体、そしてその中にいるジヴァートマンでできています。死ぬと、粗大な体は捨てられて破壊され、再生することはありません。再生するのは精妙な体とその中にあるジヴァートマンです。死んで肉体を離れた魂は、短期間霊体（spirit body）に宿った後、天国に行き過去世での行為の結果を楽しむか、地獄に行って結果を苦しむかします。もし過去世で概ね善行を為し悪行は少しだけであったのなら、魂は初めに短期間地獄に行き、その後はるかに長い期間を天国で過ごすと考えられ

ています。逆に、過去世が悪行ばかりであったら、初めが天国で後から地獄に行きそこで長い期間苦しむことになります。天国でも地獄でも新たな行為、新たな働きは為されません。過去世での結果を消費し尽くすと、人間として再びこの世に生まれ出て、解脱を目指して奮闘するのです。

このように、私たちは天国で楽しむ、または地獄で苦しむかしてカルマを使い果たすと、人間として再び生まれて解脱を求めて歩むのです。ですから、この人間の世はカルマ・ブミと呼ばれています。これは、新たな働きを為すと共に、楽しみや苦しみを味わうことができるということです。解脱を目指すとは、大まかに言えば粗大な体を持たなくなると言うことです。粗大な体、肉体に再び生まれてくることはもうありません。これが、ムクティすなわち解脱の大まかな意味です。では、どうしたらそうなれるのでしょうか。まず、世俗の楽しみを求める気持ちをなくすことです。世俗的な快樂は神の喜びに比べればはるかに小さいのです。家族を持つ喜びは神と共に生きる絶対の至福にはとうてい及びません。

積極的発想と消極的発想

ムクティ、解脱を求める気持ちは、人生の苦しみから解放されたいという願望が裏にあるわけですから、消極的

な発想であると言えます。人として生まれてくれば怒り、高慢、欲、疑い、恐れなどにより肉体的にも精神的にも大きな苦しみを味わうことになります。ブッダの言ったとおり、「すべては苦しみである (sarvam duhkham)」ので、楽しみさえも苦しみに満ちています。すべては苦しみだから、ニルヴァーナ、ムクティ、解脱を求めるのです。これはムクティの消極的な捉え方です。一方、積極的発想は、神と共に生きる喜び、神の喜びを得たいというものです。苦しみから逃れることだけを目的にすると、再び世俗的な喜びを求めて新たな苦しみを味わいます。ちょうど、ムンダカ・ウパニシャッドにある二羽の鳥の片方のようなものです。あるいは、先ほどお話ししたように、自然の摂理により棒で頭をたたかれるのです。

神の喜びを求め、神と共に生きたいという願望は、ムクティの積極的で高い捉え方です。このように考えることで、私たちは必要であればどんな努力もしようという真の意欲が湧いてきます。心を浄めて純粹にし、願望をコントロールし、自己を抑制し、神への愛を育み常に神を思う努力です。そうすれば、靈的努力の困難を受け入れる気持ちになります。積極的な意欲がなければ靈的努力もやがて尻すぼみになり、靈的实践に何の喜びも見出せなくなります。靈的努力と神の恩寵によりムクティに達することで、人は願望から解

放され、再び粗大な体に生まれてくることはなくなります。神の恩寵によりカルマが燃やされ使い尽くされるのです。

ムクティの状態

ムクティの状態とは何でしょうか。ムクティには、神と共に生きることと神と一体になることの二つがあります。神と共に生きることはバクタの目標です。バクタとは「砂糖を味わいたい」と考える信者です。一方、神と一体になるのはギャーニの目標です。ギャーニとは識別と知識の道を歩む信者で「砂糖になりたい」と考えます。

ムクティには四つの状態があります。

- 1) サーロッキヤ・ムクティ：神と同じ領域で生きられる解脱
- 2) サーロ皮皮ヤ・ムクティ：神と似た形を持つ解脱
- 3) サーミッピヤ・ムクティ：神の近くに生きる解脱
- 4) サーユッジャ・ムクティ：ギャーニのムクティで、神と一体になる

1~3 のムクティはバクタのムクティであり、信者はすでに経験していると言われています。その理由は、

- 1) この宇宙は神のものであるから、信者は神と同じ領域で生きている
- 2) 神は人を神の似姿に創られたと聖書に書いてある

3) 神は遍在している、つまり信者は神の近くに生きているというものです。

しかし、多くの信者はこのことにほとんど気付いていません。この三つのムクティの重要性や隠れた意味を理解していないのです。これに気付きこれを理解するには、霊的努力が必要です。

四番目のサーユッジャ・ムクティは神との合一であり、ギャーニが求めるムクティです。

ムクティの種類

ムクティにはさらに三種類があります。一つ目は肉体にいる間のムクティで、ヒンドゥーの聖典では「ジヴァン・ムクティ」と呼ばれています。これは、願望や世俗のことに振り回されず、常に至福に満ちており、内にも外にも神とのつながりを感じています。このような状態にある人をジヴァンムクタと呼びます。二つ目のタイプはヴィデーハ・ムクティと呼ばれ、死語のムクティであり段階的なプロセスを踏みます。ウパニシャッドによると、純粋な魂が粗大な体を離れると、精妙な体は「祖先の天国」に行きます。ここで言う祖先とは天人のことを言い、私たちの通常の祖先ではありません。ここから精妙な体は「月の天国」か「太陽の天国」に行きます。その後、ブリハスパティ、

ヒラニヤガルバ（ブラフマーの天国。シュリー・ラーマクリシュナ・ローカ、クリシュナ・ローカ、ブッダ・ローカとも言われる）の天国に行き、そこに永遠に留まります。なぜこのように異なる領域を段階的に進むのでしょうか。それは、このプロセスの途中で少しでも願望が表面化することがあれば、再び人として生まれねばならないからです。そして、三つ目がギャーニのムクティであるサーユッジャ・ムクティです。これは至高の实在、ブラーフマン、神との合一です。

場合によっては、ブラフマ・ローカに達した魂（仏教ではボーディ・サットワと呼ばれる）が苦しむ人々への憐れみから再び生まれてくることがあります。あるいは、神が自らの意思で人の姿を取って使命を果たす時に、そのような魂に手助けを求めるのです。スワミー・ヴィヴェーカーナンダやスワミー・ブラマーナンダ、スワミー・プレマーナンダは、神が使命を果たすのを手伝うために神に召されてこの世に生まれたのです。このような魂らはヒンドゥーの聖典でイシュワラコティと呼ばれ、生まれた時から願望が全くありません。彼らが唯一望むことは、解脱への道を示して人類を救うことなのです。

神の恩寵

最後のポイントはムクティと神の恩寵です。シュリー・ラーマクリシュナは、どれほど努力しても神の恩寵がなければ解脱を得ることはできないと繰り返し言っていました。つまり、神の恩寵は解脱に大変重要なのです。さらにシュリー・ラーマクリシュナは、神は子供のような性質をお持ちだとも言っていました。宝物を持っている子供が、ある人にはいくら頼まれても宝物をあげないのに、ある人には頼まれもしないのにあげることがあるが、それと同じようなことをなさると言うのです。では、信者は一体どうすればいいのでしょうか。ただ何もせず黙ったまま神の恩寵をいただけるのを待つしかないのでしょうか。

いいえ、そのような形で神に依存することは霊的实践において決してすべきことではありません。とにかく霊的修行を積み、霊的目覚めを求めて努力するのです。心を浄め、心や五感をコントロールし、識別し、神に祈り神を瞑想し神の御名を唱えて神への愛を育むよう努めるのです。そうやって準備をして神の御前に自らを示して神のご判断を仰ぐのです。そして最後に神が望まれれば、ムクティが与えられるでしょう。

願望をコントロールし、カルマとその結果から解放されてムクティを得ることは非常に難しいので、時折もう希

望はないと感じることがあります。願望を一つ克服した途端、次の願望が現れて私たちを縛るのです。一方で、神の化身が現れる時には、多くの人々に解脱が与えられると言われていました。イエスは、霊的悟りを与えてやりたい人には誰にでも与えてよいと自分は神に許可されていると繰り返し言いました。ホーリー・マザーは、お付きの女性信者の一人であるヨギン・マーに、自分はたくさんの僧にあったがシュリー・ラーマクリシュナは別格だと言ったことがあります。ヨギン・マーはその理由を、普通の僧やサドゥは自分自身の解脱を望むけれど、シュリー・ラーマクリシュナはそのような人たちを解脱させるためにやって来たからだ、と言いました。

ある時、ホーリー・マザーがコルカタに滞在中、若い僧が少年にホーリー・マザーの所に行って直接イニシエーションを受けるよう勧めました。少年は納得しませんでした。スワミー・トゥリヤーナンダジを大変尊敬していたので、トゥリヤーナンダジにホーリー・マザーからイニシエーションを受けるべきかどうか聞いてみることにしました。若い僧と少年がトゥリヤーナンダジに聞いてみると、トゥリヤーナンダジは興奮しながら少年に、こんな事を勧めてくれるなんてこの僧は真の友人だよと言いました。「ホーリー・マザーは皆を解脱させるためにい

らしたんだよ。マザーのところに解脱を求めて何千人が押しかける、ということがどうして起こらないんだろう。」つまり、ホーリー・マザーは解脱させるためにこの世に生まれてきたのだから、こんなめったにない機会をもっと活かせばいいのに、ということをやっていたのです。

ホーリー・マザーとシュリー・ラーマクリシュナという二人の神の化身は肉体を離れてしまいましたが、その霊的な力は今なお生きており、この瞬間もここに存在しています。シュリー・ラーマクリシュナやホーリー・マザーに帰依して霊的努力を少しずつでも真剣に行おうと考える人なら誰でも、彼らの恩寵により解脱することができます。これは、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子たちが繰り返し言っていた言葉です。

今月の思想

知識の座するところは頭であり
叡智の座するところはハートである。

(ウィリアム・ハズリット)

スワミー・メダサーナンダ師 講演会
テーマ：私は誰ですか？～そしてなんのために生きているのでしょうか？～
第8回 ヴェーダーンタ講座(熊本)の記録

今回は「自分自身の本性を知る：Atmanam viddhi」ということがテーマでした。

私たち人間は他人のことや自分以外の物についてはよく分かっていますが、自分が何者であるのか、またどうしてこの世に生まれてきたのかについて分からない人が多いのが現状です。

人はみな幸せになるためにこの世に生まれてきていると私は考えます。そこでよりよく生きるためには自分自身、そして自分の人生の目的を知ることが必要であるとの講義を通じて学びました。

まず私たちは自分自身を知るために、人格を形成している基礎となるものが何であるのかを知らねばなりません。マハラジのお話によりますと、私たちの人格とは「魂」であり、常に変化をしている肉体や心と違い、魂は永遠であり、変化をしないものであります。

では如何にして本性である魂を知ることができるのでしょうか？そのためにはまず「識別」し、そして心で心を「内省」することが大切であると分かりました。私たちの人格の源である「魂」は内なる自己「アートマン(自我)」であり、実際にはこれのみが実在し、その他のもの、つまり肉体や心は非実在のものであるということも学びました。そして魂は「自己のコーディ

ネーター」の役割を果たすと同時に、自己を悟るまでは幾度となく再生を繰り返し（輪廻転生）また自分自身を理解しえたとき、再生は終焉を迎え、悟りの境地に至ることができる（解脱）ということも理解できました。つまり、言い換えるならば、「人は自分の本性を知るために生きている」ということが分かりました。

マハラジのお言葉の中に「So a ham : 私はブラーフマンです」というキーワードがありました。それが私たち人間の本質であり、それに気がついたならば、私たち一人ひとりが持つその「神性」を輝かせてゆくことが大切であると深く感じました。ブラーフマンとは「絶対の真理」、つまり時間や場所、空間に縛られない偏在、永遠かつ無限なもの。そしてこれこそが、真の存在であり、知識であり、至福であるということも分かりました。そして、至福は自分の外に探すのではなく、自分の内に探すものであるということにも改めて認識しました。

また「自分と他人は同じである : No one is stranger.」と考えること、万物が魂のレベルでつながっているということを忘れずに日々の生活を送らなければならないと感じました。そしてマハラジが教えてくださったお言葉、「私は純粹意識（ブラーフマン）である」と常に自分に言い聞かせながら、

これからの人生、たとえ辛いことがあったとしてもそれを乗り越えて歩いてゆこうと思います。

真理の道を理解できるよう、今後もヴェーダの教えをより深く学び、それを実生活の中で実践できるよう研鑽を積んでゆきたいと思います。この度マハラジの講演会に参加できたお導きに深く感謝しております。素晴らしいご講話、誠にありがとうございました。
（蓑田幸恵氏による寄稿）

忘れられない物語

店屋の主人

クーファ（イラクの古い都市）の市場を、がっしりした体格のよい男が歩いていた。男の足取りには自信があふれていた。日に焼けた精悍な顔には、戦場で敵に切りつけられた跡が片目の角に残っていた。身にまとった布はぼろぼろに破れていた。

市場の中にある店屋の主人が、周りの友人を笑わそうとしてこの男に侮辱の言葉を浴びせた。男は同じように自信に満ちた足取りで歩き続け、店屋の主人の言葉に少しも動じず、主人の方を垣間見ることさえしなかった。男が遠くに行くと、主人の友人の一人が言った。「お前が今笑いものにした人が誰だか分かっているのか。」

「知らないよ、あんな奴。」店主は言った。「毎日ここを一文無しが何千って通るけど、そいつらと一緒にだろう。なあ、誰なんだ。」

「何てことだ！あの人を知らないのか。」友人は驚いた。「あの方はマリク・アシュタルだぞ。アリーの最高司令官だ。」

「マリク・アシュタルだと？ライオンさえ恐れる勇気を持ち、敵はその名を聞いただけで震え出す、あのマリク・アシュタルだと？」

「そうだ、あの方はマリク・アシュタルだ。」

「俺は何てバカなんだ！何てことをしてしまったんだ！マリク・アシュタルはきっと俺を厳しく罰するに違いない。今すぐ走って行って、謝って許しを乞おう。」

こう言うと、店主は友人を帰らせ、大慌てで店に鍵をかけた。走っていくと、マリクがモスクの方に曲がるのが見えた。店主はマリクに続いてモスクに入ったが、マリクが祈り祈り始めたのを見て、終わるのを待った。マリクの祈りが終わり、店主は恐れ入った様子で名乗るところ言った。「私は先ほど、友人によく思われようとしてあなたを

侮辱した者です。大変失礼なことをしました。心からお詫び致します。」

マリクは立ち上がると店主を見下ろしながら言った。「アラーにかけて言うが、私がこのモスクに来たのはお前のためだけではないのだ。お前が大変無知で誤った考え方をもち、理由もなく人々を困らす者であることが分かったのだ。哀れに思ったからここに来てお前の代わりに祈り、アラーにお前を正しい道に導いてくださるようお願いしたのだ。」そして続けざまに言った。「お前が恐れているようなことは全く考えていなかったよ。」

(Br. Mutahhari 著 『Anecdotes of Pious Men』より)

2010年ヴェーダーンタ協会 クリスマス・イブを祝う集い 『イエス・キリストの気高い人格』 スワミー・メダサーナンダによる 講話





イエス・キリストが生まれたのは二千年以上も前のことです。イエスは大工の息子だったわけですが、世界にはこれまで大工や大工の息子は数多く存在したのに、人々の記憶に残り尊敬を集める大工は他にいません。これは、イエスの資質に特別な何かが、人々に彼を信仰したいと感じさせる何かがあったからに違いありません。だからこそ悠久の時を超えイエスはこの世界で語り継がれているのです。このようにイエスが永遠不滅であるのは、彼に備わっていた霊的資質、神なる性質です。彼の中には、神様の特別な力が現れていました。イエスは、神の御力により人類を導き、人類に平和への道、霊性の光へと辿り着く道を指し示す運命だったのです。だから、世界中の人が彼を礼拝し、彼の誕生日を祝います。心の平安と悟りとを求め、大変多くの人がイエス・キリストに帰依しています。

私たちのラマクリシュナ僧団はイエスと特別な結びつきがあります。まず、私たちの宗派の創始者であるシュリー・ラマクリシュナは、宗教の調

和を信じていました。ラマクリシュナはヒンドゥー教の修行僧でしたが、イスラム教とキリスト教の道も自ら実践し、ムハンマドとイエスのビジョンを得たのです。イエスが現れた時、イエスはラマクリシュナの体の中に溶け込み融合したのです。ですから私たちの本部や各支部では毎年クリスマス・イブをお祝いします。さらに、これは偶然のことなのですが、スワミー・ヴィヴェーカーナンダやスワミー・ブラマナンダを始めとするシュリー・ラマクリシュナの弟子の僧らが、修道士として生涯を過ごす誓いを立てたのもクリスマス・イブでした。後に、自分たちが厳粛な誓いを立てた日が僧にふさわしい日であったことを知り、彼らは大変喜びました。



隠された本当の意味

イエスの『山上の説教』は非常に有名ですが、これはイエスが弟子らに霊的アドバイスをしたものです。今日は、この中の次の教えについて考えてみたいと思います。「心の清い人々は、幸い

である。その人たちは神を見る。
(Blessed are the pure at heart, for they shall see God.) 「幸いである」を意味する英語の「blessed」という言葉は、辞書で見ると「幸運である」という意味が出ていますが、これには「grace」すなわち「恩寵」を受けている、というニュアンスがあります。ここに、重要な概念があるのです。この言葉に隠された考えについてもう少し詳しく見てみましょう。

この「幸いである」の他、「その人たち」、「心の清さ」、「神を見る」という語句についても、順に見ていきましょう。イエスのこの教えで、「その人たち」とは神を信仰している人々、神を愛し神を礼拝している人々、神を見、神を悟りたいと願う人たちを指しています。



では、神とは何でしょう。神とは絶対の存在であり遍在です。すべてを知っておりすべてが見える、全知全能の存在です。創造、維持、破壊を行い、永遠無限な純粹意識です。神は魂すなわち自己という形で私たち一人一人の中に住んでいます。あらゆる生き物の

中にも物の中にも住んでいます。

神を見たい人は誰か

さて、「心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る」というわけですが、なぜ信者は神を見たいと思うのでしょうか。なぜ神を悟りたいのでしょうか。神様が大好きで神様への大きな愛から神を見たいと思う人もいます。必要だからとか、欲しいものや祈りたいことがあるからとかではなく、彼らはただ愛のために神を愛しているのです。また、困難を乗り越えたい、喜びや平安を得たいと考える人たちもいます。無知から解放され叡智を得たい、死を超越して永遠不滅となりたい、そして束縛から解放され自由を得たいと考える人たちです。神を見、神を悟ることで、人は永遠の喜びを得ることができます。叡智を得、永遠不滅となり自由になれるのです。信者はこうした大きな経験を得るために神を見たいと考えるのです。

神を悟るのはよくある自然なことなのでしょうか。それとも特別なことなのでしょうか。ご存知の通り、神を見たいと思う人はたくさんいますが、本当に見られる人はごくわずかです。神の悟りを得られるのはどんな人なのでしょう。イエスは「心の清い人」であると言いました。ハートの清らかさと心の清らかさは同じ意味です。つまり、

神様は私たちのごく近くにいらっしゃる、私たちの中にも外にもいる遍在の存在でいらっしゃるのに、私たちに神様が見えないのは、心やハートが純粹でないからなのです。神を見るための条件とは、純粹であることなのです。

純粹であるとは何か



「純粹」とはどんな意味でしょうか。純粹な水と言え、汚れやばい菌、バクテリアなどの入っていない水のことであり、これをきれいな水、純水と呼びます。同様に、純粹な心とは汚れない心のことです。心の汚れとは何でしょうか。驕り、怒り、欲、妄想などです。これらが心の汚れと言われるのは、心に傷ができて周りがきちんと見えなくなってしまうからです。めがねが汚れているとよく見えません。水が汚れていたら健康に害を与えます。同様に、心の汚れは私たちの靈的健康の害となるのです。適切に考え、行動し、感情を持つことができなくなってしまうのです。ですから、私たちは心を浄めて心を純粹にしなければなりません。

科学者は脳の働きとの関わりが大きいです。信者は心の働きにより大きな関心があります。靈的な人は、怒りや欲望などの心の汚れをコントロールします。これらの汚れの原因は小さな「私」です。有限の「私」、束縛された「私」、利己的な「私」、時間と空間に支配され肉体と心にはばかり目を向ける「私」。このような「私」は、私、私の家族、私の友人、私の大切なものに縛られています。この「私」が、痛みや苦しみ、恐れ、不安、いらだちを生むのです。

特に、こうした不純な汚れは、私たちの中にいらっしゃる神様のビジョンを得る妨げとなります。ですから、私たちはこの誤った考え、小さい自己であるという考えを取り除く必要があります。小さな「私」を超越し、小さな「私」を大きな「私」と入れ替えるのです。有限の「私」を無限の「私」と、無知な「私」を叡智ある「私」と、束縛された「私」を自由な「私」と、利己的な「私」を利己心のない「私」と入れ替えるのです。そうして初めて、私たちは汚れがなくなり浄らかで純粹な心を持つことができるのです。

純粹になる

水をきれいにしたり眼鏡や部屋を掃除したりするのは簡単です。物理的に

きれいになるのはたやすいことです。しかし、心を浄めることははるかに難しく、長期間にわたって努力を続ける必要があります。これは靈的格闘と呼んでもいいでしょう。心の汚れは何重にも実に分厚くこびりついていますから。肉体や心を中心にした私たちの発想は、奥深くまで根付いてしまっているのです。

心の清い人たちは本当に運がいいと言えます。幸運とは通常偶然に何かを得ることを指します。つまり、幸運とは努力の届かない領域にあるのです。では、心の清らかさとは偶然得られるものなのでしょうか。ある意味ではそうだと言えます。ご存知の通り、シュリー・ラーマクリシュナの弟子の修道僧らは幼い頃から大変純粋な心を持っていました。しかしこれは、前世で奮闘努力し純粋さを獲得したからなのです。だから彼らは生まれた時から純粋だったのです。

努力



しかし、大半の人は長い間努力し続

けて初めてそのような純粋さを得ることができません。少し頑張っただけで純粋になることもあります。その後で何らかの問題が起きると再び墮落します。ですから、私たちは長い長い間努力を続けて、驕り、怒り、欲望、妄想などと格闘しなければなりません。心の純粋さだけでなく、肉体の清らかさ、生命力、感覚の純粋さも必要です。これらはすべて相関しているのです。



では、この努力とは何をすればいいのでしょうか。肉体、感覚、心をコントロールし、良いことをして悪いことをしないようにするのは、イエスは、善行を実践する具体的で役に立つ方法をたくさん述べています。東に向かって進めば西から遠ざかるように、前向きなことをより多く行えば、否定的なこと、害になるようなことはやらなくなるものです。イエスはこう言っています。「義に飢え渴く人々は幸いである、その人たちは満たされる。」努力とは、正しい生き方、道徳的な生き方を求めて行う努力のことです。

イエスはまたこうも言っています。

「心の貧しい人は幸いである、天の国はその人たちのものである。」「柔和な人たちは幸いである、その人たちは血を受け継ぐ。」このように、謙虚さ、利己心のない行為を実践すればよいのです。イエスは繰り返し、利己心や怒り、妬みには愛、思いやり、許しを実践して対抗するように言っています。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」「憐れみ深い人々は幸いである、その人たちは憐れみを受ける。」なども有名な言葉です。人を許せば天の父はあなたを許して下さるのです。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」ムハンマドもコーランの中で同様のことを言っています。シュリー・サーラダー・デーヴィーは言いました。「息子よ、自分を傷つけた人を罰するよう神様にお願いしてはいけません。むしろ、その人を許して下さいとお願いしなさい。その人のために祈るのはもっといいことです。」

純粹であること、神に委ねること、完全であること



イエスは、世俗的なものを願う代わ

りに靈的なことを願うようアドバイスしました。物質的財産を求めるのではなく靈的財産を求めなければなりません。「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。」つまり、これらは永遠の資質となることを意味しています。

大切なのは、心の清らかさを求めて努力している時に、私たちの中に潜む不純な傾向を引き出すものを避けることです。靈的に純粹になろうと頑張りながら、同時に感覚的な楽しみに耽ることはできません。そんなことをすれば、靈的な努力は無駄に終わってしまいます。これについてイエスはこのように言っています。「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。」

このような心の清らかさは、神への深い信仰を持ち神にすべてを委ねることなしには決して得られません。すべてを神様にお任せしましょう。イエスは言っています。「御心が行われますように、天におけるように地上にも。」

完全であることが私たちの本性

純粹を求めるこの努力が、最後には完全さを求める努力へと私たちを駆り立てます。これが人間の一生のゴールです。もちろん、完全になった時私たちは神を悟ります。完全さを求めるこの格闘において誰を理想とすればいいのでしょうか。神です。神様がこの格闘における私たちの理想です。イエスは言います。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」私たちの本性はまさに完全です。ですから、私たちは完全にならなければなりません。教会の人たちは私たちの中にある罪についてよく語りますが、これは興味深いことです。聖書の中でイエスは、私たちが皆罪を持って生まれる、つまり罪人であるとは一度も言っていないのです。むしろ、イエスは神の国は私たちの中にあると言っています。

同じように、ヴェーダーンタは、私たちの本性は純粹であると言っています。私たちの心の汚れは、投影されているだけです。汚れを取り除けば私たちの本性である完全性が輝き出すのです。スワミー・ヴィヴェーカーナンダが、人を罪人と呼ぶことが罪であると言ったのはこういう理由からです。さあ、今日はクリスマス・イブですから、私たちの心が清らかになり私たちが完全になるよう祈りましょう。イエスは完全でしたし、神は完全です。私たちの本性も純粹で完全なのです。私

たちの心が清らかになり私たちが完全になれば、私たちは神の悟りに恵まれ、幸いとなるでしょう。



発行：日本ヴェーダーンタ協会
249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel: 046-873-0428
Fax: 046-873-0592
Website: <http://www.vedanta.jp>
Email: info@vedanta.jp